



TITLE:

ドイツ社会思想史研究：プロイセン
・ドイツ国家における社会思想の
諸形態(Abstract_要旨)

AUTHOR(S):

山口, 和男

CITATION:

山口, 和男. ドイツ社会思想史研究：プロイセン・ドイツ国家における
社会思想の諸形態. 京都大学, 1975, 経済学博士

ISSUE DATE:

1975-05-23

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/220714>

RIGHT:

| | |
|---------|---|
| 氏名 | 山口和男 やまぐちかずお |
| 学位の種類 | 経済学博士 |
| 学位記番号 | 論経博第38号 |
| 学位授与の日付 | 昭和50年5月23日 |
| 学位授与の要件 | 学位規則第5条第2項該当 |
| 学位論文題目 | ドイツ社会思想史研究 ——プロイセン・ドイツ国家における社会思想の諸形態—— |

論文調査委員 (主査) 教授 平井俊彦 教授 大野英二 教授 大橋隆憲

論文内容の要旨

本論文は、いわゆる「プロシヤ型」資本主義化のなかで、19世紀末のドイツの社会思想がいかなる特殊な形態をとってあらわれるかを、ドイツにおけるマルクス主義の発展と、マックス・ウェーバーの思想について探ろうとしたことに、その主要な狙いがある。

まず、第1部において、1890年代のドイツの現実的・思想的状況が特色づけられ、そのなかでドイツ社会民主党の体質が検出される。ビスマルク失脚後の、いわゆる「束縛から放たれた社会」で、ブルジョワジーは経済的に自立化する能力と機会をえながらも、政治的にはブルジョワ的自由主義を放棄して、政府・ユンカーと結合して自己の主導性を揮うことができなかった。というのも、背後に労働者階級とそれを政治的に組織する社会民主党が巨大な政治的圧力として登場してきたからである。他方で、社会民主党はといえば、1. マルクス主義の原理への忠誠と卑近な目前の政策とが無媒介に二元化され、2. 国家としての党組織をブルジョワ社会内部で維持することを至上目的とする「組織愛国主義」が確立され、3. とくにカウツキーにみられるように、ダーウィン進化論に典型的な自然的進化法則が社会発展にも貫徹すると信仰が生まれた。こうした傾向に主体的・意識的行動の役割を対置させたのは、ローザ・ルクセンブルクやパルプスなどの急進派であった。

第2章「農業綱領をめぐる論争」のなかで、1890年代中期のドイツ社会民主党の2つの党大会、フランクフルト大会とプレスラウ大会で戦わされた農業論争が、取り上げられる。ここでは、積極的な行動意欲を体制内の改良活動として理論化する修正派と、この体制的改良をマルクス主義の原則からの逸脱として拒否し・具体的行動に出ない正統派とが、分出し、相互に反発しあう。だが、これら両派は鋭く対立しあいつながらも、組織の維持のみを自己目的とし・官僚機構化した党のなかに共生していた。さらに、両者は経済発展および文明・文化とつよく結びついて社会主義が表象され、社会主義への道が進化としてつかまれているという点で、共通の思想的体質をもっていた。たとえば、修正派のダーヴィドにおいて、農村開発など文化促進や生産力の発展が社会主義に至る道だと信じられ、正統派カウツキーにおいても、自然必

然的な経済発展と文化的進歩の線上に社会主義が展望されていた。

先進国革命説をとるこれら2つのオプティミズムの潮流に対して、1907年にドイツ社会民主党内部にローザ・ルクセンブルクを中心とする第3の潮流があらわれたが、すでに1890年代に、急進的潮流の萌芽を示すパルプスがいた。第3章「革命像の模索」、第4章「世界革命の構想とロシア」、第5章「帝国主義とパルプス」の3つの章で、パルプスの思想の特質とその歴史的意義が詳しく検討されている。パルプスは党内で革命のイデーが退潮しつつある状況に対決して、政治的大衆ストライキ、プロレタリアの委員会的自治組織の樹立、その指導による農民その他の市民勢力との共同闘争によって、クーデタに対する消極的抵抗をプロレタリアによる権力奪取の積極的闘争へと転化させることを構想した。この具体的な革命闘争の方式は、やがて1905年にペテルブルク・ソヴェトとして実際に試みられ、ロシア革命の闘争方式の一つの原型となった。のみならず、パルプスの革命思想の特色は、ドイツ社会民主党に支配的なヨーロッパ中心の革命思想ではなく、激動する世界資本主義分析とそれに照応する世界革命の構想にあった。すなわち、先進資本主義国の工業発展が世界市場発展の起動力として、未開国を開発し、工業化させていく革命的力をふるう。資本主義経済は国民経済のワクを超えて、旧ヨーロッパ大陸のみならず、地表のあらゆる部分をまきこんでいく。こうした世界資本主義論の地平から、パルプスは階級闘争もまた世界的規模と関連において闘われねばならぬと考えた。むしろ、資本主義の発展のおくれた後進国ロシアにおいて矛盾が激発し、そこでプロレタリアートの主導するブルジョア革命が実現することを予想し、ここから社会主義を実現する可能性を確保するとともに、これは西ヨーロッパ諸国での社会主義革命への発火点となるべきものであった。

第2部の2つの章のなかで、東エルベ農業労働者問題と世襲財産制問題に対するマックス・ウェーバーの見解が解明される。1890年9月におこなわれたドイツ社会政策学会の農業労働者調査のなかで、ウェーバーは東エルベの調査を担当した。このなかで、ウェーバーは一方で方法的特色として、下部構造還元主義に反対して、東部労働者の自由への衝動の役割を大きく評価し、このことがウェーバー独自のエートス論と結びついている。とともに他方で、『国民国家と国民経済政策』に示されているように、どこまでも国民の権力価値関心を基準として、ユンカー的な農業資本主義化に対決して、農民的土地所有の創設を提唱した。こうしたウェーバーの中間層農民の強化育成政策は、世襲財産制問題に対する彼の態度のなかにも貫ぬかれている。1895年にミクエルが世襲財産制法案の作成を計画し、1903年に政府原案として発表されたが、この法案に対して、ウェーバーは自由思想連合の立場にたって反対論を提唱した。世襲財産領地は肥沃で市場に近い良質な農地であるが、資本家がこれを買取るために、大土地所有となり、中農層の没落を促すとともに、大土地所有制のもとでは常備の農業労働者よりも移動する季節労働者を歓迎するために、農村定着人口を稀薄ならしめるためである。こうした事実認識にたち、また現実のユンカー経営が資本主義化の道を歩んでいることを認めながら、国家理性の立場から、農業経営を多数の分割地借地人に委ねた。

論文審査の結果の要旨

1. これまで、マルクス主義思想が一つの超歴史的な世界観または社会理論として取り上げられてきた

傾向に対し、本論文はむしろ、これを相対化し、いかにその発展が歴史に規定されるかを解明した点に、一つの大きい特色をもつ。ことに、党大会における議事録を資料として、フランクフルト大会とブレスラウ大会での修正派と正統派との対立面と共通面とを実証的に整理し、ドイツ社会民主党の思想的体質を導出したことは、本論文の大きい功績である。

2. 本論文の主力は、これまでわが国では未開拓のバルブスの思想を、大衆ストライキ論、世界資本主義論およびロシア革命論について分析した点にある。このことによって、バルブスの世界革命思想の構想が明らかにされた、のみならず、ドイツ社会民主党のヨーロッパ中心の革命論がバルブスの思想と対比されることによって、その思想的体質がより鮮明になり、SPD 研究に新しい光をあてることができた。

3. マックス・ウェーバーの思想的特色を、東エルベの農業労働者問題と世襲財産制問題について解明したことも、本論文の一つの学問的価値である。ことに、ウェーバーのエートス論や没評価的な認識方法と国民主義的な立場との関連をダイナミックに追求して、本論文をきわめて彫の深いものとしている。

4. だが、本論文に関していくつかの問題点を指摘できる。まず、バルブスのコスモポリタニズムを強調することによって、ドイツ社会民主党の一面を明らかにしえたのであるが、このコスモポリタニズムはどのような限界をもつものであるか。コスモポリタニズムとナショナリズムとは単に対立する概念ではなく、どこで結びついているかが解明されねばならない。さらに、ウェーバーの中農育成政策は、ドイツの国家理由に基づくものであるとしても、プロシヤ型の道の再編に解消しうるものかどうかは、残された問題である。

前述した未開拓な分野に分析のメスを入れ、原資料を駆使して新しい問題をドイツ社会思想史の研究に提起した点において、本論文は学界の水準を充分に高めるものである。

よって、本論文は経済学博士の学位論文として価値あるものと認める。